

B型肝炎ウイルス再活性化

今回は少々マニアックな話題となりますがB型肝炎ウイルスの再活性化についてです。まずはB型肝炎ウイルスについておさらいします。B型肝炎ウイルスは幼少期の垂直感染(母子感染)と成人期の水平感染が主な感染経路です。幼少期の免疫が未熟な時期に感染してしまうとB型肝炎肝炎やB型肝炎ウイルス持続感染者となります。一方でウイルスが排除された場合は既往感染者となります。B型肝炎ウイルス持続感染者と既往感染者においてB型肝炎ウイルスが再増殖することが再活性化と呼ばれます。既往感染者は基本的にB型肝炎ウイルスがいなくなった治癒状態からの再増殖であり、de novo B型肝炎とも呼ばれます。de novoはラテン語で「最初から」とか「あらためて」という意味、消え去ったウイルスがまた出てくることからこのように呼ばれています。なぜB型肝炎ウイルスの再活性化が問題になるのかと、再活性化によっておこる肝炎はしばしば重症化し致死的になるからです。

B型肝炎ウイルス再活性化の原因と検査

B型肝炎ウイルスの再活性化は何もなくおこることはまずありません。ほとんどは免疫の低下によって起こり、その主な原因は免疫抑制療法や化学療法などの治療です。免疫抑制療法は自己免疫性疾患、炎症性腸疾患、膠原病、リウマチなど広い疾患に対して行われる治療です。化学療法は癌患者さんが手術の前に癌を小さくするためや手術ができない場合に行われます。特に血液の腫瘍に使用されるリツキシマブはB型肝炎ウイルスの再活性化が起こりやすいとされています。再活性化によっておこる肝炎自体も問題ですが、それによってこれらの原疾患の治療がストップしてしまうことも問題となります。ですのでこれらの治療前には必ずB型肝炎の検査をおこなうようにしています。具体的にはHBs抗原、Hbc抗体、HBs抗体、HBV-DNAなどを血液検査で調べています。事前に検査してHBs抗原が陽性のB型肝炎ウイルス持続感染とわかれば核酸アナログなどの投薬を開始します。Hbc抗体やHBs抗体が陽性でHBs抗原が陰性の場合には既往感染となりますので、1-3ヶ月ごとに血液検査をおこない肝機能検査とHBV-DNAを調べます。これらが上昇した際にはB型肝炎ウイルスが

再増殖したサインですので酸アナログ製剤を開始します。

まとめ

B型肝炎ウイルスの再活性化がおこるのは非常にまれですが、生じた際には重症化して命に関わることもある病態です。またそれによって化学療法などの治療がストップしてしまします。可能な限り事前にB型肝炎ウイルス検査をおこない持続感染と既往感染の状態をみつけることが重要です。B型肝炎ウイルス持続感染と判断された場合や既往感染であっても再活性化が起きてしまった際には我々肝臓専門医が対応いたします。

高齢化や生活習慣も関連し、癌になる患者さんは年々増えていきます。癌患者さんが増えれば化学療法の患者さんも必然的に増えるため、ますますB型肝炎ウイルスの再活性化に注意が必要と思われれます。このような理由から、少々専門的な内容の話でしたが今回はB型肝炎ウイルスの再活性化を話題とさせていただきます。

文責 千葉 充